

ことばを思考に使う力の育成過程における 「つぶやき」の分析

代 表 者：岸野 麻衣
(福井大学大学院教育学研究科講師)

共同研究者：石井 恭子
(福井大学大学院教育学研究科准教授)

浅川 陽子
(お茶の水女子大学附属小学校教諭)

研究成果要約

研究活動概要

子どもは幼児期から児童期にかけて、身近な人と相互交渉するための生活言語に加えて、時間空間を隔てた不特定多数に伝える言語を習得するようになり、それを思考に使うことができるようになっていくとされている。授業の中での子どもの「つぶやき」もそのステップの一つであり、教師はつぶやきの中にある思考を読み取り、言語化して学習に運用していくことが必要であるといえる。教師の専門性としても、即興的に子どものことばを運用したり、子どものことばを省察したりする力量は重要である。そこで本研究では、小学校低学年段階の授業を取り上げて、子どもの「つぶやき」に焦点を当て、ことばを思考に使う力が育成される過程について、(1)つぶやきの背景にある学級の特徴、(2)授業におけるつぶやきの特徴と教師の対応、(3)授業者と研究者による授業の振り返りの過程、を検討した。それにより、ことばを思考に使えるようになるためのプロセスとそこでの教師の対応や、子どものことばに対する教師の運用力を授業実践の中で高めていく方法を明らかにした。具体的には、ある小学校1年生の学級で、5月、7月、11月の3期において、それぞれ1週間ずつ、登校から下校まで、主に担任教師が授業を行った時間を中心にビデオによる観察を行った。観察を行った日には可能な限り観察者と授業者で振り返りを行った。

成果概要

本研究の結果、次のことが明らかになった。第1に、つぶやきの背景にある学級の特徴を検討するため、朝の学級指導場面の分析を行った結果、時期を経るにつれて子どもが自律的に活動するようになっており、子どもが意見を自由に発して教師に認めてもらおうとする関係性ができていた。立ち歩きの目立った子どもも、自分の思いや不安をことばで統制できるようになっていた。つぶやきの背景には、このような関係性の変化や個々の子どもの変化があることがわかった。第2に、授業中の子どものつぶやきと教師の対応を抽出した結果、9種類のつぶやきと4種類の対応が見出された。量的・質的分析の結果、教室での授業において、ことばを思考に使えるようになるためのプロセスでは、まずは個々の子どもの思いや授業への参加の承認から始まり、学級での発話ルールの共有化を背景に、一人のことばについて複数の子どもが反応し、より学習課題の本質に関わることばが発せられると思考に結び付けられるようになっていくことが明らかになった。第3に、観察後の振り返りの内容を分析した結果、子どものことばに対する運用力を高めていく上で

は、具体的な観察場面を手がかりに、学級全体での発話ルールや雰囲気形成を検討しつつ、個々の子どものことばや行動を見直して多様な解釈や解決策を話し合い、子どものことばから思考プロセスを検討することが必要であることがわかった。

成果活用について

子どものつぶやきの背景に教師との関係性や個々の子どもの変化を見取る必要性や、小学校低学年の授業において子どものつぶやきを用いてことばを思考に使う力を育成していくプロセスについて、本研究の対象学級以外の学校での教育実践にも反映させ、教育改善に活用していく。また、子どものことばに対する運用力を高めていく方法については、福井大学教職大学院や免許更新プログラムにおいても活用していく。さらに、研究成果を理論としてより精緻化し、学界にも発信していく。

今後の研究課題

第1に、本研究では授業におけるつぶやきという学級全体での発話を取り上げたが、個々の子どもがことばを思考に使う力をどのように発達させていたのかについても検討していく必要がある。第2に、本研究では小学校低学年段階を取り上げたが、学年が上がるにつれて、学習内容は抽象的なものになり、より思考を必要とするようになると考えられ、中・高学年での子どものことばと教師の運用についても検討していく必要がある。第3に、本研究では一つの学級を取り上げて検討してきたが、学級成員や担任教師による違いについても検討していく必要がある。